

教師の言葉かけが生徒の学習意欲に与える影響 ～中学校体育科の授業における言葉かけの内容に注目して～

岡崎 奏斗*・阿部 隆幸**
(平成30年8月31日受付；平成30年11月29日受理)

要 旨

本研究は、生徒の学習意欲が高まる「教師の言葉かけ」の、内容の適切さを明らかにすることを目的とする。中学校保健体育科の器械運動「マット運動」において、全8時間授業実践を行なった。全8時間中、7時間の授業実践において質問紙調査及び、授業のビデオ記録を用いて分析を行なった。その結果、以下3点のことが明らかになった。①運動有能感尺度で12項目中6項目において正の相関を示したことから、授業を通して生徒の運動有能感が向上した。②「励まし」の言葉かけによって生徒たちの授業者に対する「受容感」が高まることが示唆された。③「技術的フィードバック・励まし」の言葉かけを続けることによって、運動有能感尺度の「統制感」因子に良い影響を与えられることが示唆された。

KEY WORDS

教師の言葉かけ, 学習意欲, 中学校体育

1 問題の所在

文部科学省(2017)⁽¹⁾は、子どもたちが生涯にわたって能動的な学習を続けていくためにも、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められる。」と述べている。また、文部科学省は、中学校学習指導要領解説保健体育編(2017)⁽²⁾において、「体育科、保健体育科における学習過程については、これまでも心と体を一体としてとらえ、自己の運動や健康についての課題の解決に向け、積極的・自主的・主体的に学習することや、仲間と対話し協力して課題を解決する学習等を重視してきた。」としており、今後、より一層保健体育科においても子どもたちが主体的になる学習が求められている。さらに、全日本教職員連盟(2016)⁽³⁾は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すために、適切な支援や評価等によるフィードバックを行うことを促している。

吉川ら(2007)⁽⁴⁾は、「『相手が学習意欲をなくしたとき、相手が明白に困っているとき』に『前向き』の助言をすることで、学習意欲を向上させる可能性が高い。」としている。

深見ら(1997)⁽⁵⁾は、教師の積極的なフィードバック行動や望ましい表現のしかたが、大きな学習成果(形成的授業評価)を生み出すとしている。また、上江洲ら(2011)⁽⁶⁾は、教師の言葉かけについて言及し「学習者に対して賞賛や助言などの言葉かけを前の試行を踏まえて継続的に行うことは、技能成果や運動有能感を高めるのに有効である」としている。以上から、「教師の言葉かけ」が学習意欲を引き出し、学習成果にも作用するということが明らかになっている。

一方で、深見ら(1997)⁽⁷⁾は、「一層重要な課題として、フィードバックの『言語内容の適切さ』が研究されるべきであろう。」としており、教師の言葉かけの内容について、具体的に検証されている研究は見当たらない。

2 研究の目的

本研究は、中学校体育科において、生徒の学習意欲を高めるための、「教師の言葉かけ」における、内容の適切さを検証することを目的とする。

3 研究方法

3. 1 調査対象 公立中学校第3学年の生徒36名

3. 2 調査期間 平成29年10月～11月

3. 3 調査単元

単元：器械運動「マット運動」(全8時間)

全8間の単元計画は表1のようになっている。

表1

単元時数	単元内容
1	単元の説明, 導入, 体ほぐしの運動 質問紙調査(1回目)
2	現在の自分の力の確認
3	現在の自分の力の確認
4	倒立練習
5	連続技の練習
6	連続技の練習,
7	テスト前の確認, 練習
8	テスト(発表会) 質問紙調査(2回目)

3. 4 調査方法

3. 4. 1 生徒の振り返り記述(選択自由)

生徒に対し、「授業者の言葉かけ」に関する振り返りを毎授業時間の終了前に行なった。振り返りの項目内容は表2の通りである。

表2

1	授業者に声を掛けてもらったか
2	(1) 心に残った, 印象に残った言葉 (2) その理由
3	役に立ったかとその理由

実際に使用したアンケート用紙

授業アンケート

() 学年 () 組 () 番 名前 ()

1. 今日の体育の授業で, 先生に声をかけてもらいましたか? いいえ

はい

2. 今日の授業「先生の声かけやアドバイス」で①心に残った, または印象に残った言葉, そして②その理由を次の文に続けて書いてください

①私は, 先生の声かけやアドバイスの中で,

倒立前転のとき, どんな感じかがアドバイスしてくれました

②その理由は,

自分がどんな感じにできるか分かるから

3. 先生のアドバイスや声かけは役に立ちましたか? いいえ

はい

なぜなら,

自分がどの技ができるのか分かるから

3. 4. 2 質問紙調査

岡沢ら (1996)⁽⁸⁾の運動有能感尺度を使用し、生徒に対して、単元開始時と単元終了後の2回調査を実施した。項目内容は表3の通りである。

表3

<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動能力がすぐれていると思います。 2. たいていの運動は上手にできます。 3. 練習さえすれば、必ず技術や記録は伸びると思います。 4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。 5. 運動をしている時、先生が励ましたり、応援してくれます。 6. 運動をしている時、友達が励ましたり応援してくれています。 7. 一緒に運動をしようと誘ってくれる友だちがいます。 8. 運動の上手な見本として、よく選ばれます。 9. 一緒に運動する友達がいます。 10. 運動について自信をもっている方です。 11. 少し難しい運動でも、努力すればできると思います。 12. できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思います。

運動有能感尺度は、3つの因子で構成されている。

- ・「身体的有能さの認知」(自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知に関する項目)
- ・「統制感」(練習すれば、努力すればできるようになるという項目)
- ・「受容感」(運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知に関する項目)

各因子4項目計12項目からなっており、1. よくあてはまる、2. あてはまる、3. どれでもない、4. あてはまらない、5. まったくあてはまらない、の5件法になっている。今回は1が1点、5が5点とした。

3. 4. 3 ビデオ記録

体育館の対角にビデオ2台設置し、マット運動の様子を7授業時間記録した。体育館の配置は図1のようになっている。

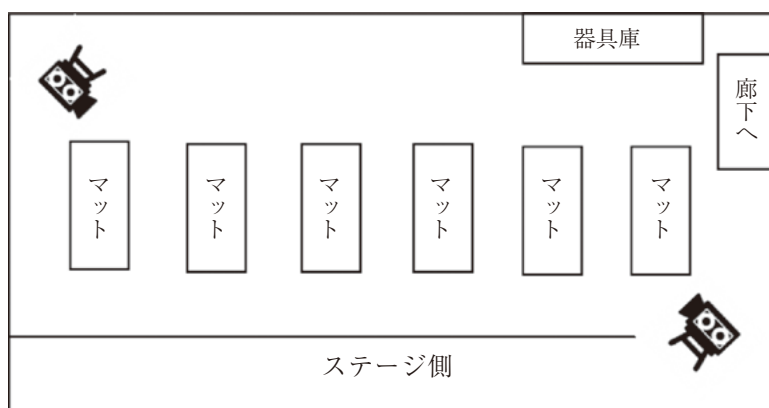


図1

4 分析方法

4. 1 発話プロトコル分析

シーデントップ(1988)⁽⁹⁾に基づき、イベント法で発話プロトコルを作成した。

4. 2 分類

プロトコル分析で起こした教師の発話プロトコルと授業の映像を基に、言葉かけの分類を行なった。

言葉かけの分類は、西川 (1999)⁽¹⁰⁾に基づきEricson&Simonを使用し、教職経験10年以上の教員2名が独立し行なった。今回は、授業の中でも、生徒が最も活動する授業展開となる時間のプロトコル分析を行なった。

分類カテゴリーは、柴田ら⁽¹¹⁾の教師行動のカテゴリーを基にした。また、上江洲ら(2011)⁽¹²⁾は、「学習者に対して賞賛や助言などの言葉かけを前の試行を踏まえて継続的に行うことは、技能成果や運動有能感を高めるのに有効である。」としていることから、技術的フィードバックの「肯定的」、「矯正的」、「否定的」の下位カテゴリーとして「継続性」⁽¹³⁾を付け加えた。また、投げかけにおいては、表3の⑤目標・評価に関する投げかけは、「単元や授業目標や評価を再確認するような言葉」、⑥他者とのかかわりに関する投げかけは、「他の学習者とのかかわりを促すような言葉」とし、継続性があり技能成果や運動有能感に有効ではないかと考え、下位カテゴリーに「継続性」を付け加えた。さらに、教師の言葉かけの中には、これら以外の言葉かけもあると考え、大きなカテゴリーとして「その他」の項目を付け加えた。以上の3つを付け加えたカテゴリーを今回は使用した(表4)。

表4

分類カテゴリー		
技術的フィードバック	①肯定的	継続性
	②矯正的	
	③否定的	
④励まし		
投げかけ	⑤目標・評価に関する	継続性
	⑥他者とのかかわりに関する	
⑦目標・評価に関する応答		
⑧行動の可視化		
⑨その他		

5 結果

5.1 振り返り(選択)

今回は、7時間の授業の中から有意がある時間を調査するため、表1の項目1の「授業者に声をかけてもらったか」と項目3の「役に立ったか」の回答「ハイ」、「イエ」を直接確率計算した。また、最初の1時間は主に導入にあて、実際に試技と検討を繰り返した後の2回目から7回目までの計6時間の変容を見ることにした。

それぞれの結果は表5、表6のようになった。

表5 質問紙項目「授業者に声を掛けてもらったか」の各回集計

授業	ハイ (人)	イエ (人)	偶然確立 (両側検定)	検定
2回目	22	3	$p=0.0002$	** ($p<.01$)
3回目	25	7	$p=0.0021$	** ($p<.01$)
4回目	29	2	$p=0.0000$	** ($p<.01$)
5回目	27	4	$p=0.0000$	** ($p<.01$)
6回目	26	6	$p=0.0005$	** ($p<.01$)
7回目	25	3	$p=0.0000$	** ($p<.01$)

表6 質問紙項目「役にたったか」の各回集計

授業	ハイ (人)	イエ (人)	偶然確立 (両側検定)	検定
2回目	21	4	$p=0.0009$	** ($p<.01$)
3回目	27	5	$p=0.0001$	** ($p<.01$)
4回目	28	3	$p=0.0000$	** ($p<.01$)
5回目	27	4	$p=0.0000$	** ($p<.01$)
6回目	25	7	$p=0.0021$	** ($p<.01$)
7回目	25	3	$p=0.0000$	** ($p<.01$)

以上から、6時間すべての授業で「ハイ」の項目に有意がみられた。その中でも、表2、3共に有意な数値を示した授業の最初が4回目にあたることから4回目の分析を行なった。

5. 2 質問紙調査

運動有能感尺度を、1要因参加者内計画の分散分析を行なった。その結果、12項目中6項目で正の相関がみられた(表7)。

表7

質問項目		Mean	S.D.	有意差検定
4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。	事前	2.32	1.23	$F(1,30) = 5.94$ * $p < .05$
	事後	1.90	0.78	
5. 運動をしている時、先生が励ましたり、応援してくれます。	事前	2.45	0.98	$F(1,30) = 12.27$ ** $p < .01$
	事後	1.97	0.70	
6. 運動をしている時、友達が励ましたり、応援してくれています。	事前	2.68	1.00	$F(1,30) = 21.67$ ** $p < .01$
	事後	1.84	0.81	
7. 一緒に運動をしようと誘ってくれる友達がいます。	事前	2.35	1.00	$F(1,30) = 7.85$ ** $p < .01$
	事後	1.87	0.91	
9. 一緒に運動する友達がいます。	事前	2.32	1.14	$F(1,30) = 8.75$ ** $p < .01$
	事後	1.87	0.79	
12. できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思います。	事前	2.32	1.20	$F(1,30) = 6.95$ * $p < .05$
	事後	1.90	0.96	

有意差が示されたのは、第2因子「統制感」と第3因子「受容感」であった。特に、第3因子「受容感」においては、全ての項目において正の相関がみられた。

5. 3 言葉かけの分類

4回目の授業の発話プロトコルの分類を行なった結果は以下の通りである(表8)。

表8

分類カテゴリー		回数(回)	%	
技術的フィードバック	肯定的	継続性有	12	3.5
		継続性無	17	4.9
	矯正的	継続性有	39	11.0
		継続性無	27	7.6
	否定的	継続性有	4	1.1
		継続性無	5	1.4
励まし		48	13.6	
投げかけ	目標と評価に関する	継続性有	4	1.1
		継続性無	20	5.6
	他者とのかわりに関する	継続性有	0	0
		継続性無	3	0.8
目標・評価に関する応答		97	27.4	
行動の可視化		4	11.1	
その他		74	20.9	
合計		354回	100%	

6 考察

まず正の相関が全ての項目においてみられた運動有能感尺度の第3因子「受容感」に着目すると、「5. 運動をしている時、先生が励ましたり、応援してくれます。」の項目は1%水準で有意に上昇した(表9)。また、授業中の教師の発話プロトコルの分類において「励まし」の項目が全体の約14%を占めていた。「励まし」の発話は、「目標・評価に関する応答」に次いで2番目に多い48回に達していた(表10)。

これらの結果から、授業の中で教師が「励まし」の言葉かけが、生徒たちの授業者に対する「受容感」を高めたと考えられる。

表9

質問項目		Mean	S.D.	有意差検定
5. 運動をしている時、先生が励ましたり、応援してくれます。	事前	2.45	0.98	$F(1,30) = 12.27$ ** $p < .01$
	事後	1.97	0.70	

表10

分類カテゴリー	回数(回)	%
励まし	48	13.6

また、運動有能感尺度の第2因子「統制感」において、正の相関がみられた項目は「4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。」や「12. できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになります。」であり、どちらも5%水準で有意に上昇している(表11)。

さらに、発話プロトコルの分類を行なった4回目の授業では、倒立練習において「技術的フィードバック」の項目が全体の約30%を占めていた。その中でも否定的なフィードバックの回数は少なく、肯定的・矯正的なフィードバックが授業を通して行なわれていた(表11)。

これらのことから、教師が「技術的フィードバック」や「励まし」の言葉かけを続けたことが、運動有能感尺度の「統制感」因子に良い効果を与えることが示唆された。

表11

質問項目		Mean	S.D.	有意差検定
4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。	事前	2.32	1.23	$F(1,30) = 5.94$ * $p < .05$
	事後	1.90	0.78	
12. できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになります。	事前	2.32	1.20	$F(1,30) = 6.95$ * $p < .05$
	事後	1.90	0.96	

以上から、「技術的フィードバック・励まし」の言葉かけを続けたことにより、運動有能感尺度の「統制感」因子に良い効果を与えることが示唆された。

7 結論

本研究では、以下3点のことが明らかになった。①運動有能感尺度で12項目中6項目において正の相関を示したことから、授業を通して、生徒の運動有能感が上がった。②「励まし」の言葉かけによって生徒たちの授業者に対する「受容感」が高まったことが示唆された。③「技術的フィードバック・励まし」の言葉かけを続けることによって、運動有能感尺度の「統制感」因子に良い影響を与えられることが示唆された。

これより、中学校の保健体育の授業において「技術的フィードバック・励まし」の言葉かけを行うことで、生徒は教師に認められているという「受容感」を得て、教師と生徒間の信頼関係作りにも役に立つと考える。また、運動が苦手な生徒も「努力すればできるようになる」という感覚を得ることができると考える。

8 今後の課題

本研究では、①運動有能感尺度で12項目中6項目において正の相関を示したことから、授業を通して、生徒の運動有能感が上がった。②「励まし」の言葉かけによって生徒たちの授業者に対する「受容感」が高まったことが示唆された。③「技術的フィードバック・励まし」の言葉かけを続けることによって、運動有能感尺度の「統制感」因子に良い影響を与えられることが示唆された。以上の3点が示唆された。しかし、示唆はされたものの裏付けることが出来なかった。そのためには、生徒の発話分析・行動分析を行う必要があると考える。また、この分析とともに、「うれしかった・ためになった教師の言葉かけ」等の項目の質問紙調査や自由記述調査を行なうことで、生徒の学習意欲に直接関係ある言葉を特定することが可能だと考える。

引用及び参考文献

- (1) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説総則編」, p.4, 2017.
- (2) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説保健体育編」, p.7, 2017.
- (3) 全日本教職員連盟：「『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ』に関する意見」, 2016.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/10/12/1378117_8.pdf
(参考日2017年11月29日)
- (4) 吉川正剛・三宮真知子：「生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響」, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 鳴門教育大学高度情報研究教育センター, vol.4, pp.19-27, 2007.
- (5) 深見英一郎・高橋健夫・日野克博・吉野聡：「体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討：特に子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に」, 体育学研究, 日本体育学科, vol.42, pp.167-179, 1997.
- (6) 上江洲隆裕・岡澤祥訓・木谷博記：「教師の言語活動による『継続的フィードバック』が技能成果, 運動有能感に及ぼす影響に関する研究－走り幅跳びの授業実践を通して－」, 教育実践総合センター研究紀要, 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター, vol.20, pp159-166, 2011.
- (7) 前掲 (5)
- (8) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎：「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」, スポーツ教育学研究, vol.16, No.2, pp.145-155, 日本スポーツ教育学会, 1996.
- (9) シーデントップ, 高橋健夫他訳：「体育の教授技術」, pp.274-275, 大修館書店, 1988.
- (10) 西川純：「実証的教育研究の技法《これでできる教育研究》」, pp.37-38, 大学教育出版, 1999.
- (11) 柴田卓也, 竹内智光, 水落芳明：「学習者同士の相互作用を促す教師行動と付箋活用の効果に関する研究－目標と学習と評価の一体化をめざした中学生器械運動単元の学習から－」, 上越教育大学研究紀要, vol.31, 別刷, 上越教育大学, 2012.
- (12) 前掲 (5)
- (13) 前掲 (5)

Effects of Teachers' Voices on Students' Learning Motivation: Paying Attention to Teacher's Voice Content in Middle School Physical Education

Kanato OKAZAKI* · Takayuki ABE**

ABSTRACT

This research clarified the appropriateness of content of the “teacher’s voice,” which increases students’ learning motivation, in eight middle school gymnastics classes, i.e., “Mat Exercises.” Analysis was conducted using a questionnaire survey and video recording of lesson practice for 7 of 8 hours. The research clarified the following three points: ① Since 6 of 12 items showed positive correlation on the exercise competence scale, students’ exercise competence improved through classes. ② Voice “encouragement” raised students’ “sense of acceptance” of the teacher. ③ Results suggested that continuing the voice of “technical feedback/encouragement” would positively influence the “sense of control” factor of the exercise competence standard.